

浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

第113回 (2018.07.23) の要旨

拝読文(『真宗聖典』59～60頁)

世間の人民、父子・兄弟・夫婦・室家・中外の親属、当に相敬愛して相憎嫉することなかるべし。有無相通じて貪惜を得ることなかれ。言色常に和して相違戻することなかれ。ある時には心に靜いて恚怒するところあり。今世の恨みの意、微し相憎嫉すれば、後世には転た劇しく大怨と成るに至る。所以は何となれば、世間の事かわるがわる相患害す。すなわちの時に急やかに相破すべからずといえども、然も毒を含み怒りを畜え、憤りを精神に結びて、自然に克識して相離るることを得ず、みな当に對生してかわるがわる相報復すべし。人、世間の愛欲の中にありて、独り生じ独り死し独り去り独り来りて、行に当り苦樂の地に至り趣く。身、自らこれを当くるに、有も代わる者なし。善惡變化して殃福処異なり、宿予、嚴待して当に独り趣入すべし。遠く他所に到りぬれば、能く見る者なし。善惡自然にして行を追うて生ずるところなり。

まず「世間の人民」という言葉があります。「世間」はインドの言葉の翻訳語です。「世」は時間、「間」は空間を表します。だから世間という言葉自身が時間と空間という意味を持っています。society (社会) や world (世界) という英語の翻訳語に近い言葉のように我々は「世間」ということを感じてしまっていますが、実はそうではなく、仏教語の「世間」とは、我々を取り巻く時間・空間を押さえています。

天親菩薩の『浄土論』では、浄土という空間・時間を包むような概念を世間という言葉で押さえて、二種世間清浄ということを行っています。二種世間の一つは器世間です。器というのは「うつわ」です。器世間とは、浄土や仏国土と言われるような仏陀の世界が、この世にも存在する環境世界のようなことを表現する言葉です。仏国土や極樂国土・浄土・樂邦などの言葉で表現される場所を、人間がこの世で感じている山や河があるような時間・空間の如くに、浄土にもそういう場所があることを呼びかけています。またもう一つ、衆生世間というのを別に立てます。衆生という場合は、人々が共同体として生きている如くに、浄土にも衆生世間があるというように語りかけられています。これを天親菩薩は二種世間として教えて下さっています。『無量寿経』では、法蔵菩薩の本願の内容が、衆生を苦悩から突破できるように場所的に呼びかけています。その本願が呼びかけている内容を、場所的に、あるいは空間的に、語りかけるということを天親菩薩は莊嚴功德という言葉でおっしゃっております。

今この経典がここで「世間」と言っているのは、この世のことです。「世」という言葉自身はもともと時間のことで、現在という時間をこの「世」という言葉で表していたのが、いつの間にか意味が変わって、空間のような意味になってしまったのだと思います。言葉は流動的なものですから、意味がどんどん変わって多義的になっていくということがあるわけです。

「世間の人民」というときの「人民」は人々ということ。その人民の在り方は、関係として「父子・兄弟・夫婦・室家」があります。室家というのは、家族というような意味です。そういう様々な関係によってこの人間社会というものが成り立っているわけです。そういう人々に「当に相敬愛して相憎嫉することなかるべし」と呼びかけています。「憎」はにくむ、「嫉」はねたむことを言います。どちらも、自分に向けられるべき愛が他人に向けられた場合にくむ・ねたむという心理が起こります。このねたむという心理もなかなか厄介なものです。我々の心の中にもそういうことが常に起こります。親子や兄弟の場合でも、例えば親が一人の人間を叱ると、片方が叱られないのに何で自分だけ叱られるのだと感じて、相手を嫉妬するという心理が煩惱として起こってしまうわけです。人間が関係の中で生きていくとき、人間の心理としての憎嫉は、なかなか面倒だと思います。しかしそういうことがあってはならないと経典は説いているのです。

「有無相通じて貪惜を得ることなかれ」。有ったり無かったりする時に、人間は有れば有ったで惜しみ、無ければ無かったで欲しがります。これはこの段の前に説かれていました（『真宗聖典』58頁）。そういう心理がどうしても出てしまいます。人間の所有欲というものは「そんなに持ってどうするの」というほど持ちたがるわけです。「どうせ亡くなる時には持っていけないよ」と言われるほどに、何でもかんでも貯め込んでしまう。だから貪ったり惜しんだりすることがあってはならないということですが、これもなかなか厄介で難しいことだと思います。

「言色常に和して」というときの「言色」の「言」は、仏教で三業というときの口業と関係しています。業は身業・口業・意業と三種あって、身体で表す行為と、口つまり言葉で表す行為と、そして心の中に起こる内面的な行為を仏教では三業といいます。表に現れた行為だけが業ではなく、仏教の場合は内面に起こるものも行為として見るわけです。だから業というのは、その人間に、あるいはその周囲の人間の関係存在の中に、必ず何かの結果を残すのです。それを業という言葉で言い当てようとするわけです。単なる行為なら、行為が起こった途端に消えてしまうわけで、行為自身には、何も残るものは無いのですけれど、業となると起こした行為が、起こした本人にも何らかの行為の結果を残すこととなります。このように、業として次々に起こす行為は次の時間にまた影響を与えてくる。そういう意味で口業、すなわち言葉というものが大事なのです。仏陀の説いた八正道の中にも「正語」というものがあり、言葉を大事にして、正しい言葉を使いなさいと教えるわけです。しかし本当に人と人との間での言葉には難しいものがあります。言葉が悪意を持って出た場合には相手を傷つけるし、善意で出ても相手に誤解される場合があるなどして、いろいろなことが起こるのが言葉なのです。

「言色」の「色（しき）」は、色・受・想・行・識という五蘊の中にあります。その場合の色は、color という意味ではなくて、物質性という意味です。受・想・行というのは、心理作用で、最後の識は意識です。五蘊は人間存在を身体的・意識的存在と見て、その中に「色」という物質的な面を含めるわけです。物質的な面があって、それが意識をするという意味をもって人間は生きています。生きるということは、心理作用と共にあるのです。こういうことを色・受・想・行・識という五つの言葉で仏教では押さえています。また、その場合の「色」というのは、何か手で触れるようなものだけかと言うとそうではありません。人間の感覚器官である眼、耳、鼻、舌、そして身体という五つの感覚器官も意味します。この感覚器官のことを五根と言います。その五つの感覚作用の内容になるものが「色」（物質性）です。例えば眼であれば、眼根に対して見るという作用が起こります。これは形であったり色（いろ）であったり大きさであったりするものです。そういうものが、「色」の意味内容なのです。もちろん眼の対象だけが色法ではなくて、耳の場合でも、耳で聞く音、例えばそれは音量であったり、音質であったり、リズムやメロディーであったり、そういうものも色法の内容です。五根という五つの機能で感覚される内容全てが色法なのです。

だから面白いと思うのは、仏法が押さえている「色」という字の内容は、五根の対象界なのです。それは感覚作用の内容ですから、形があるものだけではないのです。おまけに六根という場合には、第六根に意識作用が加わります。つまり考えるという内容も含まれるのです。考えるということには言葉が付いてきます。だからこれは非常に範囲が広いわけです。それが「色」という字の意味です。人間の身体とは何かと言ったら、生きている感覚器官の総合作用だと言っても良いわけです。眼が機能する人は、眼がはたらくし、耳がはたらく人も耳が聞き当てます。そういう感覚器官の総合体系であるのが、身体です。生きている身体、これがなくなった場合は、扶塵根という言葉があって、単なる物質になってしまいます。つまり屍骸です。機能がなくなってしまうということです。そういう場合は、色・受・想・行・識という五蘊のはたらきがなくなって単なる物質になってしまう状態のことを言います。つまり、そういうあらゆる存在、身体的・意識的存在というものを「言色」という言葉で押さえているのです。

したがって「言色」が「常に和する」というときの「和」とは、調和・平和と言われたりするように、命の在り方に無理がないといえますか、身体的・意識的存在としての人間の命の在り方が平和であるというような在り方のことです。違和感という言葉がありますけれど、何かストレスがあったり、疲労感があったりするのではなく、何か存在そのものが和やかであることを意味します。

続いて「相違戻ることなかれ」と言われていますけれど、命のあり方が何かぎくしゃくしたり、痛くなったり、苦しくなったり、そういう在り方を「相違戻する」という言葉で表しています。

「ある時には心に諍いて恚怒するところあり」。「心に諍う」とは、心理的、内面的に諍うことを言います。「恚怒する」の「恚」も「怒」もいかりです。そういうことがあると、「今世の恨みの意、微し相憎嫉すれば、後世には転た劇しく大怨と成るに至る」ということになってきます。「今世」というのは、今のこの時間のことです。それに対して「後世」というのは、後の時間です。だから今、怨むということが起こると、これが先ほど申しました意業となり、それが増幅するのだということを「大怨と成るに至る」と言っています。何か人間の心理が状態として益々膨れ上がり、そして増殖するわけです。

それはどうしてかと言うと、続けて「所以は何んとなれば、世間の事かわるがわる相患害す」とあります。我々に命が与えられて共にある時間・空間の場所、それが「かわるがわる相患害す」と言われています。「かわるがわる」というのは、お互いに、交互にということです。「患」はわずらうという字ですし、「害」は文字通り害するということです。

「すなわちの時に急やかに相破すべからずといえども、然も毒を含み怒りを畜え、憤りを精神に結びて」。急に破るということが出来ない時に、毒を含み怒りを蓄えるのですから、厄介なのです。またここに「精神（しょうじん）」と読む字があります。仏教語では「しょうじん」と読んで、何か人間の意識の一番基にある作用のようなものを押さえているのだと思います。その精神に怒りやら憤りというのが、付いてしまう。そういう怒りが起こって、その怒りが付いているような自分しか、自分としては感じられない、そういう在り方を「憤りを精神に結ぶ」と言います。

そして「自然に剋識して相離るることを得ず」というときの、この「自然」は、本願自身がはたらく必然性としての自然とは意味が少し違います。ここでの自然は、自分に起こった煩惱が自分を縛ってきて、縛った煩惱によって、さらにまた自分が縛られる。憤りや欲を起こしたりすると、それが自分にくっついてきて、それが自分となって自分を動かし、さらにそれが自分を縛ってきている、そういう構造です。

ですから「自然に剋識して」と次にあります。「剋識」の「剋」は刻（きざ）むという字です。日常語で「時刻」と言うときに用います。親鸞聖人は「時剋の極促」という言葉を用いられ、この「剋」の字を使われます。「剋識（識に剋む）」というのは、前の言葉で言えば主体的な意識にひとりでに剋みこまれることです。業の経験が熏習すると言いますが、別の言葉で言えば業の結果が剋み込まれるということです。悪意を起こせば、自分が起こした悪意が自分自身に剋み込まれて、その悪意はまた自分を動かしてきます。欲を起こせば、起こした欲の結果がまた自分に傷を付けてきて、その傷がまた自分を動かしてきます。そういう因果のことです。それを切り離すことができなくなるということを「相離るることを得ず」と言っています。

次に「みな当に対生してかわるがわる相報復すべし」とあります。対生というのは、命が命に対応して、この世界を人間が生まれて生きるということを表しています。同様に「報復」ということも、前のことがらに対して、新しい行為がまた前の行為に答える。相報復しあう関係を生きているのだという人間の厳しい現実を押さえております。

そして次の「人」という呼びかけの言葉から、文脈的に様子が少し変わっていきます。「人、世間の愛欲の中にありて」とあります。この「世間」とは、先ほども出ましたように、人々と共にあるという時間・空間のことです。そして「愛欲」の「愛」は、仏教では貪愛という言葉で、煩惱のはたらきとして押さえられるものです。もちろん菩薩の愛とか、衆生に対する愛、慈しみの慈愛というように、良い意味で使われる場合もありますけれど、貪愛というように熟される場合の愛は、愛着など、貪りの内容となるような愛です。ヨーロッパから来た概念である love の愛とは、ニュアンスが違います。

そして次に「独り生じ独り死し独り去り独り来りて」という大変有名な言葉が出てきます。もちろん人間は、前の文にもあったように、夫婦、兄弟、室家などの関係の中に生まれてきますから、本当は独りで生まれてくるわけではない。しかし、愛欲というものを感ずる中では、身体という個として生まれて、生きて、死んでいく。その「個として」という面だけを取れば、大変重要な人間の事実を押さえています。しかし一面において、人間は関係性の中で生きていますから、生まれて生きて死ぬとき、決して一人では

ないという事実もあるわけです。こういう矛盾がありますが、この言葉は非常に厳しい現実を我々に伝えていていると思うのです。ある意味で命というものの事実は所詮独りなのだということです。しかし独りなのだけれども、その独りが本当にどういうふうに独りであるかということが我々の大問題なのです。

仏教で「独」と言うときには、例えば仏陀が誕生した時の「天上天下唯我独尊」という宣言が想起されます。しかしこれは、私独りが尊いのだという宣言をしたというわけではなく、独りの命としてここに生まれてあるということの持っている意味は他に代替できないということを仏陀が表明したのだと思います。そのことは人間の事実としても同様に、「独生・独死・独去・独来」としてあるということ『無量寿経』が我々に教えてくださっているのです。また、これは清沢満之が「独尊子」ということをおっしゃっていることとも同様に関係しています。「独尊子」とは、一人ひとりが独立者として独立したならば、それは同時に人間の社会・関係の中に独りあるということの尊さを自覚することになるのだということです。そして人間において、お互いに尊いということ認め合う関係が成り立つのです。親鸞聖人がおっしゃった本願を根拠として念仏者に成るといことも、お互いに同じ念仏をいただく御同朋・御同行となることです。それこそ仏教がこの世に教えとして説かれた大きな意味なのです。

次に「行に当り苦楽の地に至り趣く」とあります。この行は、時間の中に行為を起こし、苦楽の結果を招くような業のことです。仏教的なものの見方として重要な因果の考え方である善因楽果・悪因苦果のことです。このような因果の中にあつて、我々は楽が欲しいと思いつつ、どうしても煩惱の炎で悪を起こしてしまうものです。そして苦の命を招いてしまいます。そういうものが我々の存在ですから、そういうところに、人間の愚かな在り方、罪の在り方というものが教えとして語られざるを得なかったのだと思います。これが、従来伝統的に「三毒五悪段」と言われてきたこの文脈の重要な点だと思います。

そして「身、自らこれを当くるに、有も代わる者なし」とあります。「身」は単なる body ではありません。我われの身は、感覚器官の総合体系であると同時に、過去の行為の結果がこの身に残ります。つまり「身、自ら」というときの身は、単に物質的な面の身体という意味ではなく、この現実を生きている在り方、生きた自己の全体を表現しています。自身、自からが、苦楽の地に趣くような命を引き受けて生きています。それは誰も変わることは出来ないものです。つまり一人の命は一人ひとりが引き受けるのであって、他人が引き受けることはできません。先ほど申しましたように、何故一人が尊いかと言ったら、他に替わることが出来ないからです。自分が生きてきた歴史は、自分が引き受けるしかありません。これは仏教の言葉で業感縁起とも言われます。自分は自分の過去の業が今の自分に成ったという考え方です。唯識では阿頼耶識といいます。阿頼耶識が一切の経験や行為を熏習として引き受けます。

「善悪変化して殃福処異なり、宿予、厳待して当に独り趣入すべし」。善と悪とが行為の結果を引いてくる。その結果が殃（つみ）となったり福となったりする。その次の「宿予」は、過去と未来という意味を持った熟語です。「厳待」は、厳しく対峙・対応することです。善悪や禍福といった因果を過去から未来へと独り引き受けて、流転の命の中に入って行くという人間の事実を教えている文脈です。

「遠く他所に到りぬれば、能く見る者なし」。現代という時代は、こうして独りで生きていくということにおいて、人間の中から人間関係が離れていくという方向が進んでいるのではないかと思います。この文はそういう現実を言い当てているのでしょう。

「善悪自然にして行を追うて生ずるところなり」。ここでの善悪自然とは、善悪の行為の結果が殃福というような結果を引くことで、これを「業道自然」と言います。業の因果という形の自然です。自然にはもう一つ、「願力自然」というものもあります。その場合は、強い本願の大きなはたらきが自然という言葉に託されることを言います。しかし、業道自然の場合は、善悪の因が自然に業の結果として乗ってきます。恨みは恨みをお互いに呼んで、ますます膨らんでいくという自然です。また、「無為自然」ということもあって、本来の本当の覚りの内容となるような、仏陀の覚りの内容となるような法性や真如を開いて見出される真理性というものが、それ自身として一切の衆生のところに既にあるのだけれども誰も見えないような在り方を自然という言葉で示す場合もあります。

文責：戸次顕彰（親鸞仏教センター研究員）